

高齢過疎地域における人々のつながりに関する研究 (2)

—大隅半島 S 地域の実態—

A Study on the Human Networks in an Aging and Depopulated District (2)
— The Actual Situation in S Region of Osumi Peninsula —

古川恵子*・本間俊雄**
Keiko Furukawa, Toshio Honma

*鹿児島女子短期大学 **鹿児島大学

抄録：高齢過疎化が進展する状況下で、地域居住のシステムをその地域の特性の中で作り上げていく必要がある。鹿児島市からフェリーと自動車で2時間の距離に位置し、鹿児島県内で高齢化率第1位の町にある集落を調査対象地とし、20歳以上の住民を対象に個別聞き取り調査を行い、集落内・集落間・地域全体の人々のつながりの現状を把握し分析した。その結果、高齢過疎地域に共通する医療施設の問題や若者の定住促進、近年問題になっている獣害等の課題を背景に、高齢化率50%を超える地域で、高齢者たちが地域内外の人たちと安定したつながりの中で生活していることが明らかになった。地域内でのまとまりが強いので、他地域からの転入者が馴染みにくい側面はあるものの、社会活動に参加し、地域のサロン、旅行など、集落の人たちの交流も活発で、緊急時に活かされる人のつながりも常時とそれほど変わらないことが確認でき、緊急時においても期待できる素地があることが確認できた。

Key words：高齢過疎地域、人々のつながり、常時と緊急時

1. はじめに

高齢過疎地域における人々の生活の継続性については、公助と共に地域住民の互助、共助で担わざるをえない状況にある。本研究では、鹿児島県で最も高齢化が進んでいる地域の住民のつながりから、地域の特性や課題を把握し、生活維持・継続につなげる知見を得ようとするものである。

2. 研究の目的と方法

本研究は、前報^{註1～3)}と異なり地方都市から離れた図1に示す大隅半島 A 町の S 地域を対象とし、集落内・集落間・地域全体の人々のつながりの現状に関して、戸別訪問し世帯の20歳以上の各人に個別聞き取りを行い、まちづくりや非常時の連携に向けた知見を得ることを目的としたものである。

2.1 調査対象地域の概要

S 地域は、鹿児島市から自動車とフェリーで2時間余かかる所に位置している。鹿屋市に向かうバスは1日4便程度で、バス停は地域の住宅地から遠く、利用者は少ない。地域内に小・中学校が1校ずつと、公民館、交流施設があ



図1 調査対象地域の位置



図2 S 地域の写真

る。図2にS地域の様子を写真で示す。

調査対象のS地域は平成の合併前のB町にあるが、2015年のB町の高齢化率は54.5%^{註4)}で、県内で最も高齢化率の高い南さつま市笠沙町の55.2%に次ぎ第2位である。

S地域の総人口は114人で男性57人、女性57人、世帯数54、高齢化率47.4%である。地域は6班から構成されており、各班6～15世帯、約10～30人である。地域内の平均年齢は57.4歳、男性の平均年齢は55.5歳、女性の平均年齢は59.1歳である。表1の年代別・世帯別人口に示すように、高齢者が多く、1人世帯、2人世帯が多く、一人暮らし高齢者や夫婦のみの世帯が多い。平均居住年数は41.2年である。

2.2 調査方法と内容

2014年10月17日から22日の6日間、各戸を訪問し成人を個別面接して聞き取り調査を行った。「つきあいのある人」に対する回答には人数に限りがあるため、実際にはつきあいがあっても名前があげられないことが考えられる。従って本研究では、片方からだけ名前があがった場合でも双方のつながりがあるとみなす。

表2に調査項目を示す。項目数は全部で27あり、1人当たり30分程度のヒアリングを行った。

調査対象：対象地域に居住する20歳以上の住民全員を対象とする。地域内の田畑に毎週数回通い、地域の人と親しくしている人も調査対象に含む。

調査方法：全世帯を訪問し、各人にヒアリングを行った。調査項目に加え、住民生活や地域の状況についての思いを把握する自由回答も求めた。2名1組とし、図3に示す1班から6班の各班に調査員を1～3組割り振った。

3. 調査結果

対象地域は99人の成人のうち調査回答者は92名で回答率92.9%であった。図4に回答者の属性を示す。

3.1 回答者属性

性別 S地域の男女の割合はほぼ同じで、回答者の男女の割合も同様であった。

年齢 60～79歳が半数を占めており、80歳以上が18人いる。回答者の平均年齢は63.9歳である。

世帯構成 最も大きな割合占めているのは3人以上の世帯で、次が夫婦のみの世帯である。

居住年数 50年以上の居住者が約35%で最も高い割合を占めている。30～39年、20～29年がそれぞれ約20%で、高校や大学卒業後、若い時にS地域に戻ってきた人、および結婚後にS地域にきた人が多い。

職業 地域周辺は田畑で、農業が約35%、畜産（牛）が3

表1 S地域の年代別・世帯別人口

年代別人口					高齢化率
0～19歳	20～39歳	40～59歳	60～79歳	80歳以上	
11	12	24	48	19	47.4%
世帯別人口					
1人世帯	2人世帯	3人世帯	4人世帯	5人世帯	7人世帯
20	21	5	5	2	1

表2 調査項目

回答項目	内容
個人属性	性別、年齢、居住歴、居住形態
外出範囲	外出頻度、普段の外出先と手段
社会参加	参加団体
つきあい（常時）	1. つきあいがある、親しくしている人を5名程度あげてもらう（5名以上答えてもらうことも可能） 2. 名前をあげてもらった人との関係性、接触頻度 3. 名前をあげてもらった人とのようなつきあいがあるのか（世間話、お裾分け、送迎、買い物の代行など）
つきあい（緊急時）	悩みを相談できる人、緊急時に手助けを求める人

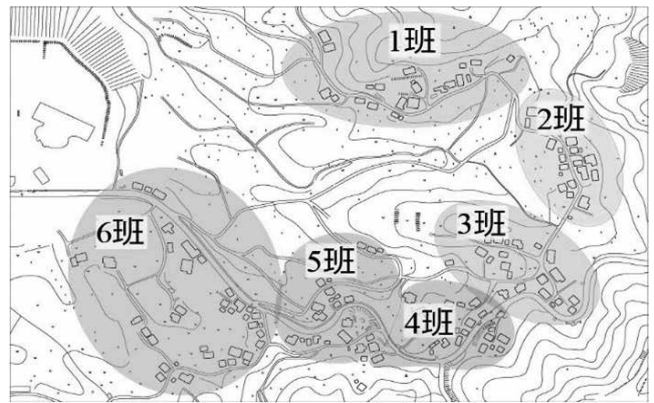


図3 S地域の回答者の班

人である。昔は畜産の割合が高かったということである。無職の人のうち12人は65歳以上で、家事従事若しくは高齢であることが主な理由である。地域内に比較的大きな建設会社があるので、公務員とともに会社員の割合が高い。高齢でも農作業をしている人が多く、身体的に健康な人が多い。

3.2 外出と社会参加

畑仕事をする人が多く、毎日外出するという回答がほとんどである。社会参加は地域の集まりなどへの参加であるが、図5に示すように老人会、睦輪会、自治会、サロン等への参加が多い。サロンや老人会では月に一度旅行などを企画しており、それを楽しみにしている人が多い。現在は何の団体にも属していないが「高齢になったら入ろうと思う」という回答者もいた。また、地域内には消防団があり、「昔は入っていたが年齢のため引退した」という人もいた。この地域には子どもに関連した活動組織はない。

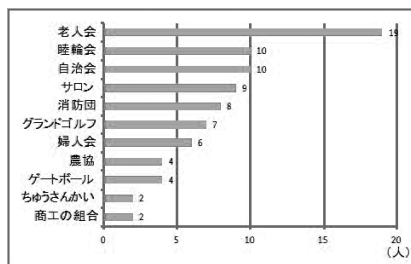
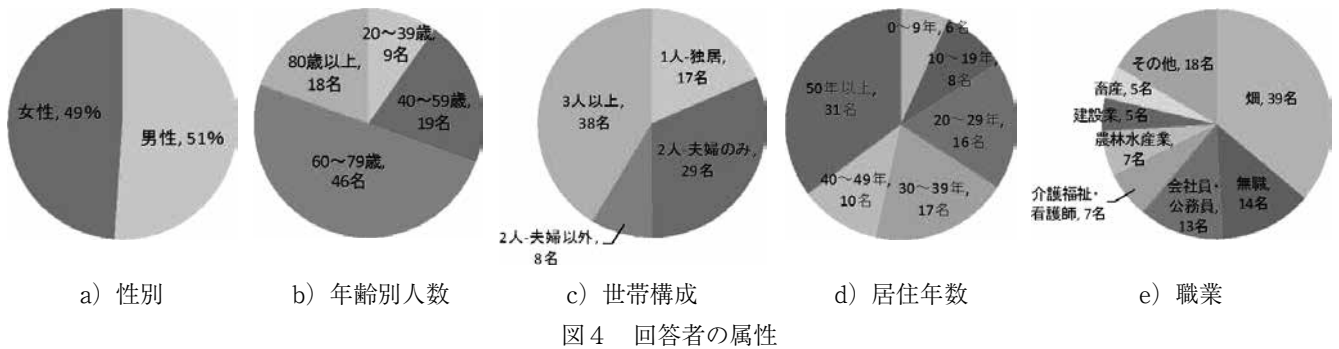


図5 社会参加

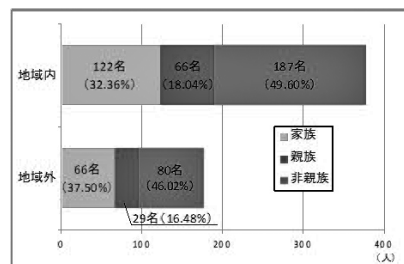


図6 付き合いのある人との関係

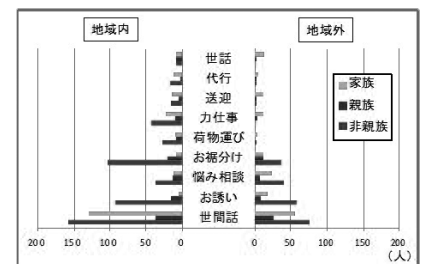


図7 つきあいの内容



3.3 人々のつながり

(1) 常時

つきあいのある人数の平均は、地域内で4.1人、地域外では1.9人である。つきあいのある人として近隣住民の名を挙げる人が多い。図6に示すように、つきあいのある人との関係は、地域内に血縁者が多いにもかかわらず、非親族とのつきあいの割合が最も大きい。地域外の人とのつきあいでは、多くが学生時代や職場の人を挙げることから非親族の割合が大きい結果となっている。

図7に地域内外の人とのつきあいの内容を示す。回答者に介護認定者はいない。「自分のことは自分です」という人が多く、身体的なサポートを周囲の人から受けることは

少ない。結果的に、「看病のような世話」「買い物等の代行」「荷物運びやゴミ捨て」などの身体的サポートの割合が小さい。「世間話」や「おすそ分け」の割合が大きい。地域内の人とのつきあいの内容に関しては、「家族」「親族」の割合が「非親族」を上回る項目はない。しかし、地域外の人とのつきあいにおける身体的サポートでは、「家族」の割合が「非親族」より大きい。これには、子どもに買い物を頼む、病院へ送迎してもらうことなどが多く含まれている。地域内でのまとまりが強いので、他地域から来た人が馴染みづらい面がある。

図8にS地域全体のつながりを示す。常時の1人あたりのつきあいの人数は5～6人で最高13人である。他とのつ

ながりが見られない部分は、家族か地域外の人だけの名を挙げた人である。

(2) 緊急時

災害時どのようにしているのかについては、「自宅から避難施設まで行く方が危険なので自宅にいる」という回答者がいた。S地域には、全戸に防災行政無線があるなど、自主防災組織が整備されているが、自動車を所有していない人は移動手段がないので避難が困難である。

緊急時の1人あたりのつながりは約3～4人で、最高10人である。常時と比べると共に少ない。

3.4 地域への要望・希望

平成の合併に関連して、「合併後イベントなどが他地域で行われるようになったことを変えてほしい」(40歳代)という意見や、「福祉・交通の便・災害対策・農業政策・あととり政策」(60歳代前半)を期待する声がある。「猿・イノシシが多くて困る」「店がない、24時間営業の店がほしい」(20歳代から50歳代)という要望や、26歳～70歳の7人が「若い人が増えてほしい」と答え、医療施設に関しては「病院が遠い、午後でも診察してほしい。総合病院を」(43～79歳)と要望している^{註5)}。

一人暮らしの81歳の女性は、「膝が痛いので、草刈りを」と回答している。「限界集落だからどうしようもない(67歳)」という意見の一方で、「皆で話をしたい、町を発展させたい(80歳)」という積極的な声もあった。

3.5 生きがい、楽しみ、がんばっていること

「グランドゴルフ」を57～80歳の12人が挙げ、「旅行・集落の旅行」を58～85歳の7人が、「サロンでのイベントや友人との集まり」を80～87歳の4人が、そして「集落での集まりや人と話すこと」を72～85歳の3人が挙げている。また「釣り」を61～80歳の7人が、「温泉」を3人が挙げている。皆で集まって話したり、行事に参加することを楽しんでいる人が、後期高齢者に多く見られる。また、「集落の人たちからよく相談を受ける・集落のために(いろいろ)やっている」(70歳)、「近所の人の買い物をしてあげる」(80歳)、「年に1回は集落の人の送迎をする」(54歳)等、地域のためにという意識で生活している回答もあった。一方、「昔はユイで畑仕事を地域で行っていたが、今はお金がかかる」と、時代を反映した意見もあった。

4. まとめ

本調査では、高齢過疎地域に共通する医療施設の問題や若者の定住促進、近年問題になっている獣害等の課題を背景に、鹿児島県の中でも先進地域にあたる高齢化率50%を

超える地域で、高齢者たちが地域内外の人たちと安定したつながりの中で生活していることが明らかになった。地域内でのまとまりが強いので、他地域からの転入者が馴染みにくい側面はあるものの、社会活動に参加し、サロン、旅行など集落の人たちの交流も活発で、緊急時に活かされる人のつながりも常時とそれほど変わらないことが確認できた。期待できる素地があるといえる。

今後は、これまでの調査対象地域に1地域を加え、南九州に位置する4つの過疎地域を比較して類似点や相違点を明らかにし、特徴と課題を整理し、地域の活性化や防災計画の提言に繋げたい。

S地域を調査してくださった、鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻生の喜多未咲子さん始め、多くの院生・学部生のみなさんと、調査協力いただいたM町S地域の方々や役場の方々に心よりお礼申し上げます。

註1) 古賀葉津美, 古川恵子, 本間俊雄, 他: グラフ理論を用いた常時と緊急時における内部構造特性の分析, 日本建築学会研究報告 九州支部 第52号・3 計画系, pp237-240, 2013.3.3

註2) 古賀葉津美, 古川恵子, 本間俊雄, 他: グラフ理論を用いた地域住民間のネットワーク解析 - 過疎・高齢地域における三集落の特性記述 -, 日本建築学会九州支部研究報告, 日本建築学会研究報告 九州支部 第53号・3 計画系, pp193-196, 2014.3

註3) 古賀葉津美, 古川恵子, 本間俊雄, 他: グラフ理論を用いた地域コミュニティの構造解析 - 過疎・高齢地域Dの人的ネットワーク -, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿) 建築計画, pp.927-928, 2014.9

註4) 南日本新聞2016.1.1 p1 「県内旧市町村高齢化率」

註5) 南大隅町ホームページ/2016.1.10

佐多診療所が2016年1月5日にリニューアルされ開所した。

<http://www.town.minamiosumi.lg.jp/minami02/minami133.asp>

参考文献

- 1) 平成27年版高齢社会白書
- 2) M市ホームページ/2015.1.10
<http://www.town.minamiosumi.lg.jp/minami01/default.asp>
- 3) 喜多未咲子, 古川恵子, 本間俊雄, 他: 過疎・高齢地域における人と人のつながりに関する調査 - 大隅半島S地域の対面アンケートとネットワーク解析の適用 -, 日本建築学会研究報告 九州支部 第54号・3 計画系, pp193-196, 2015.3
- 4) 喜多未咲子, 古川恵子, 本間俊雄, 他: ネットワーク解析

高齢過疎地域における人々のつながりに関する研究（2）

を用いた過疎地域における住民相互の関係性把握，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）建築計画，pp.917-918, 2015.9

- 5) 古川恵子，友清貴和：高齢・過疎地域における高齢者の生活を支えるつきあいの広がりに関する研究，日本建築学会計画系論文集 第568号，pp77-84, 2003.6

（平成28年 1 月20日 受理）